

最新調査成果が語る
新潟市の歴史

新潟市遺跡 発掘調査 速報会2022



2023年
2月26日(日)

会場 新潟市民プラザ

目次

| | |
|----------------------------|------|
| プログラム・発掘調査遺跡位置図 | 表紙裏 |
| 講演「新潟地域の弥生文化の魅力-周辺諸地域を結ぶ-」 | |
| | 1 p |
| 古津八幡山遺跡 | 6 p |
| 茶院A遺跡 | 10 p |
| 寺裏遺跡 | 12 p |
| 各遺跡の調査・現地説明会風景 | 裏表紙 |

茶院A遺跡出土の墨書土器



新型コロナウイルス 感染症予防のためのお願い

- ・マスクの着用をお願いします。
- ・入口での手指消毒と検温にご協力ください。
- ・体調のすぐれない方は入場をご遠慮ください。

新潟市遺跡発掘調査速報会2022 ～最新調査成果が語る新潟市の歴史～

日 時：令和5年2月26日（日） 会 場：新潟市民プラザ（NEXT21ビル6階）

プログラム

| | |
|-------------|--|
| 13：00 | 開 会 |
| 13：00～13：10 | あいさつ 文化財センター所長 佐藤敏宏 |
| 13：10～14：40 | 講 演 「新潟地域の弥生文化の魅力-周辺諸地域を結ぶ-」 石川日出志氏（明治大学教授） |
| 14：50～15：10 | 報 告 「古津八幡山遺跡 明らかになった弥生時代の埋葬施設と新たに 見つかった方形周溝墓・竪穴建物」 相田泰臣（文化財センター） |
| 15：10～15：30 | 報 告 「茶院A遺跡 西蒲原の低地に広がる奈良時代の集落群」 今井さやか（文化財センター） |
| 15：30～15：50 | 報 告 「寺裏遺跡 数百年前の村と米づくりの痕跡」 長谷川眞志（文化財センター） |
| 15：50～16：10 | ロビーにて質問受付 閉 会 |



発掘調査遺跡位置図

新潟県域の弥生文化の魅力ー周辺諸地域を結ぶー

明治大学文学部教授 石川 日出 志

はじめに

私が考古学という世界に迷い込んだちょうどその時、その環境へといざなった(?) 故・関雅之さんが、新潟県域の弥生文化を総覧して、新潟県域の弥生時代は「東西文化の接点として複雑な様相を呈」と評しました。今日に比べると当時はまだ発掘資料はごくわずかしがなく、各地で採集された土器片を検討・分析するしかできない状況でしたが、この指摘は新潟県域の弥生文化の特色を見事に言い当てています。新潟県域と周辺地域との往来は、河川や峠・海路など13ものルートがあることを強調し、数百年に及ぶ弥生時代の経過の中で周辺地域との往来がどのように変遷したのかに注視すべきだと説きました。それから約半世紀が経過し、その間に蓄積された資料からみても、北陸から上・中・下越や佐渡へ、信州から高田平野や十日町・魚沼両盆地へ、会津から下越・中越・魚沼盆地へ、秋田・庄内方面から下越や佐渡へ、置賜盆地から下越へと、少なくとも5つのルートで周辺世界と交流を重ねていることが明らかです。

日本列島のどこであっても周辺地域とは交流し合っているのが当然なのですが、じつはそれぞれ個性的な東・西・南・北の諸地域との交流が鮮やかに見出せる地域はありません。それこそが新潟県域の弥生文化の面白さ=魅力だと思います。

でも、新潟県域の弥生文化の展開を考えるには東西南北の全地域を視野に入れないと実態が理解できないという難しさもあります。時系列にしたがってその要点を見ていくことにしましょう。

1. 前期～中期前葉 (およそBC3世紀以前) : 東北的色彩が強い段階

弥生時代の文化は、縄文時代の伝統の上に大陸から稲作をはじめとする新しい技術・情報・宗教などが加わって形成されました。私は、このうち、日常生活や社会が変わる最たる基礎となった灌漑稲作の開始が一番重要だと考えますので、稲作の始まりをもって弥生時代の開始と判断します。弥生時代開始当初に日本列島にもたらされた農耕は、水田稲作と畠の雑穀(アワ・キビ)栽培が組み合わさっていました。しかし、西日本はまもなく水田稲作に特化します。一方、東日本ではむしろ雑穀栽培が盛んで、縄文時代以来の堅果類などの食料も継続して利用されています。弥生時代前期段階ですでに西日本では、数ヘクタール規模の灌漑水田を造成・経営するために集住集落が形成され、中期になるとさらに集落規模は拡大しました。

ところが東日本や新潟県域では、稲作の本格的導入は行われず、集落は数棟の住居からなるものが基本で、集住する集落は確認されていません。東北地方には弥生時代前期の水田と報告された実例が二例ありますが、私は中期に下る可能性を捨てきれないと思っています。東北では土器に粃圧痕が検出されているので稲作を否定するのは難しいものの、試験的利用に留まると思います。もう一度冷静に考える必要があります。東日本に水田稲作が広く普及するのは中期中葉(BC 3～2世紀)になってからだと考えます。

新潟県域のこの段階を代表する遺跡には、新潟市緒立遺跡・新発田市村尻遺跡・糸魚川市大塚遺跡などがあります。大塚遺跡では、西日本の稲作農耕民の土器である遠賀川式土器や、雑穀栽培が主流の愛知県東部三河地方の水神平式土器がわずかながら見られますが、むしろ目立つのは緒立遺跡や村尻遺跡と同様に東北地方の御代田式・砂沢式といった土器型式と関連が深いものです。これは何も新潟県域だけのことではなく、関東一円や長野県の北信・東信地域でも同様です。西日本からの稲作農耕民とその技術が進出し始める段階に、それに呼応するかのように東北から中部方面への土器のデザインや各種情報が南下しているようです。もちろんそこには人の往来もあったはずですが。

この段階の遺跡で、集落の姿がはっきりとつかめる例はきわめて稀です。阿賀野市猫山遺跡はその数

少ない事例で、新発田市青田遺跡^{あおた}や三条市藤平遺跡^{ふじだいら}のような縄文時代晩期末の実例と同様に、亀甲形の平面形をもつ掘立柱建物が弧状に並んでいます。縄文時代晩期以来の伝統が色濃いものです。墓も、壺再葬墓^{ほったてばしら}という縄文時代晩期以来の伝統を継承するもので、遺骸を二度にわたって処理する葬法です。猫山遺跡の再葬墓は古くに発見されたために正確には絞り込めませんが、居住域に隣接することまでは分かっています。村尻遺跡^{たない}や胎内市分谷地A遺跡^{わけやち}などでも見事な壺再葬墓が発見されていますが、居住域は明らかではありません。

生業（なりわい）がどうであったのかは、まだ詳しくはわかりません。阿賀野市六野瀬遺跡^{ろくのせ}で中期前葉の土器に粃跡が確認できますので、コメは知っていたはずですが、稲作が行われていたか、どの程度なのかはわかりません。近年では、レプリカ法といって、土器をつくった際に付着した植物種子の圧痕を型どりして顕微鏡観察することでその種を同定する方法が盛んで、中部・関東ではアワ・キビがかなり利用されたことが分かっています。しかし新潟県内では詳細に行われていないので、今後ぜひ実施してみたいところです。生業の道具である石器をみると縄文時代晩期末と大きく変わらないので、植物栽培は低調だった可能性があります。

2. 中期中葉の変革（BC2世紀頃）とその後： 本格的農耕社会への転換と地域間交流

上に述べましたが、中期前葉から中葉にかけて東日本一帯の様相が一変します。東海道筋と北陸筋とではほぼ同時に、本格的農耕社会に大きく転換する動きが明確になります。ここでは新潟県域と関係する北陸筋からみていきましょう。

北陸で起きたこの大きな転換=イベントは、石川県小松市にある八日市地方遺跡^{ようかいちじかた}の集落が中核となって実現しました。この遺跡は前期段階から始まっていますが、中期の前葉に集住集落となり、居住域の周囲に濠が巡らされる（環濠集落^{かんごう}）ようになります。石川県南部ではこの段階で唯一の環濠集落で、当地域の拠点となす集落です。そしてこの集落は中期後葉まで長期にわたって継続し、その拠点性は揺るぎません。水田域は発掘調査されていませんが、集落中央を蛇行して流れる川跡から鋤・鍬など多数の木製農耕具が発見されたことから本格的な稲作農耕村落であることは確実です。土器は、前代以来の伝統を保持する条痕文系土器^{じょうこんもん}に、濃尾平野周辺からの影響が加わり、さらに北近畿以西の櫛描文^{くしがき}という新しいスタイルの土器の特徴が濃厚になり、そうした三つの系譜（土器製作技術・デザインの伝統）が合成されます。現在の表現を借りればハイブリッド（異種混雑・雑種性^{こんごう}）が実現し、私たちが小松式土器と呼ぶ全く新しい北陸独自の土器型式が形成されます。もう一つこの八日市地方遺跡で重要なのは、この段階から大陸に由来する円筒形の管玉が、この地域特産の碧玉^{へきぎよく}を用いて盛んに製作され、周辺諸地域に流通するようになることです。

この小松式土器が、成立してまもなく、新潟県域にまで分布を拡大しています。これが新潟県域で本格的な農耕集落が出現する契機となりました。上越市南部にある吹上遺跡^{ふきあげ}や柏崎市下谷地遺跡^{しもやち}でまとまった出土例がありますし、長岡市（旧和島村^{だいぶ}）大武遺跡^{たいぶ}や新潟市西郷遺跡^{にしごう}などにも見られます。まとまった出土量ではありませんが、下越の新潟砂丘の内側に点在する各地の遺跡でも出土しています。

吹上遺跡は中期中葉から中期末まで継続した遺跡で、環濠を備え、盛んに碧玉製管玉やヒスイ勾玉を製作しています。南に峠を越えると信州の地ですが、吹上遺跡からは信州北半の土器型式である栗林式土器^{くりばやし}も多数出土しますし、吹上遺跡で製作されたとみられる管玉が信州各地から多数出土します。こうしたことを考えると、この吹上遺跡は北陸と中央高地^{くになか}の両地域をつなぐ結節点となる集落で、交流と交易の拠点となったと考えてよいでしょう。佐渡でも、肥沃な国中平野^{くになか}がありますので小松式土器が分布を拡大する当初から農耕村落が形成されたと推定されますが、現在までのところ確認できるのは小松式でも新しい段階で中期後葉のものばかりです。旧新穂村地区にある新穂玉作遺跡^{たまつくり}はその代表的な集落で、試掘調査の結果を見ると、その中核をなす平田^{ひらた}・桂林^{かつらばやし}・小谷地^{こやち}（竹の花）遺跡はわずかの空地を介して東西約1.7km・

南北0.5kmもの範囲に広がる、弥生時代中期の東日本では屈指の集落規模を誇っています。その中の平田遺跡では、中期後葉の環濠とみられる溝跡も見つかっています。この遺跡群でも佐渡で産出する碧玉と赤玉（鉄石英）を用いた管玉を盛んに生産しています。そのことは地元の計良由松さんが戦前から戦後早い段階に地道に調査研究を進めたことによって全国に知られており、そのためにこの遺跡群を「新穂玉作遺跡」と呼びます。そして興味深いのは、この新穂遺跡群で製作されたと思われる管玉が津軽半島北端の青森県宇鉄Ⅱ遺跡や北海道の大川遺跡・元江別1遺跡・紅葉山33遺跡などで発見されています。赤玉製の管玉が混じるので分かりやすいのですが、大川遺跡の碧玉製管玉は蛍光X線分析によっても佐渡産だと判明しました。私たちの想像を超える遠隔地にまで佐渡製の装身具が供給されています。

北陸系の小松式土器が中期中葉から後葉まで新潟県内の平野部に展開する段階に、この西方からの文化的影響の他に、南・東・北の三方向からの土器型式の進出も見られます。上越市吹上遺跡で信州の栗林式土器が出土することは上に述べましたが、この栗林式土器は千曲川＝信濃川沿いに新潟県内にまで分布を広げ、中・南魚沼郡域一帯は栗林式土器がほとんどを占める状態です。信濃川下流域、さらに新発田市山草荷遺跡・村上市砂山遺跡・佐渡市新穂玉作遺跡でもそれぞれ少数ですが確認できます。会津盆地に分布の中心がある南御山2式や川原町口式も阿賀野川沿いに波及しており、どの遺跡でも多数派とはなりません。下越一帯で発見されています。北方からの影響は、前期に顕著だったのが中期になるといったん薄らぎますが、新潟市西郷遺跡では前葉に属す、秋田方面の横長根A式土器が出土していますので交流が途絶えたわけでないようです。それが中期後葉になると様子が変わり、秋田方面の宇津ノ台式土器が下越で著しく目立つようになります。しかも興味深いのは、北陸系の小松式と秋田系の宇津ノ台式がハイブリッドを起こして下越の特色ある土器（山草荷タイプ）を生み出していることです。新潟県域を基準に考えると全く異なる他地域系統というべき二つの土器型式が生みだしたハイブリッド土器型式は、次の段階にさらに著しい動向を見せます。

3. 後期初頭（AD 1世紀頃）： 下越集団の活躍

新潟県域のみならず東日本各地の弥生土器には、縄文時代以来の伝統の一つとして縄目文様が施されています。この縄目文様、すなわち縄文は、通常の縄ではなく、土器づくり専用につくられた撚り紐を土器面に押し転がして生じたものです。撚り紐を土器面に対して縦に置いて横方向に転がすと、縄文の粒々（節）が左下がりに並びます。そして新潟県域から東北地方にかけては、縄文時代以来ずっと二段左撚り（LR）と呼ばれる縄文が主流でした。ところが弥生後期になると、突如二段右撚り（RL）という縄文に変化します。これは、津軽平野から北海道方面で主流であった撚り方で、下越では中期末の山草荷タイプの土器に少数現れるのですが、後期になって突如多数派に転じます。しかも、それまでは、縄文は撚り紐を横回転して施文するので縄目の粒々＝節が並ぶ条が斜めであったのが、斜めに回転施文することによって縄文の条が縦や横になる特徴もあります。これも津軽から北海道に特徴的な、北方系の手法です。土器の頸部に目だつ、菱形を何重にもかさねた重菱文は山草荷タイプを継承する文様です。村上市岩船地区にある砂山遺跡にちなんで、これを砂山式土器と呼んでいます。

そして興味深いのはこの砂山式土器とそっくりの土器群が富山・石川両県の多数の遺跡で発見されていることです。一つの遺跡で発見される土器片の数量は多くないものの、その遺跡の数は驚くほどです。上越ではこれまで一片も発見されていないので、下越から海路で富山湾や邑地潟地溝帯一帯に渡ってしばらく滞在して、その地の人びとと盛んに交易をおこなったのであろうと私はみています。現在までのところ、その出土例の最西端は、石川県最南端にほど近い加賀市橋立町大野山遺跡ですが、下越の関川村で産出する石材を使ったアメリカ式石鏃という形態の石鏃が大阪府高槻市芝生遺跡で見つかっているので、将来的には福井県遺跡でも見つかる可能性があります。

では、こうして下越から北陸に出かけた人々は何が目的だったのでしょうか。土器が発見されるだけな

ので確かなことは分かりませんが、私は、この時期は朝鮮半島に産出する鉄器や鉄素材が日本列島に急速に普及して、利器（刃物や武器）の素材が石から鉄に全面的に交替することに注目します。つまり、朝鮮半島から入手された鉄器や鉄素材が日本海沿岸伝いに広く流通するなかで、それを入手するために下越から夏場に丸木舟で北陸まで往来したのだと考えます。そして入手した鉄器を東北地方や北海道方面に搬出したのだと。東北地方では、弥生時代後期には打製石鏃など消耗率の高い石製利器は存続しますが、磨製石斧はほとんど見かけなくなります。これは鉄斧が普及したからに違いありません。

4. 後期中葉～後葉（AD 2世紀～3世紀）： 新たな時代への動き

弥生時代後期中葉以後になると、北陸では縄文が施された下越の後続土器型式は全くみられなくなります。むしろ逆に、北陸の法仏式土器^{ほうぶつ}というほとんど無文の土器型式が新潟方面に大きく進出します。新潟と石川・富山間の文化動向のベクトルが逆転するといつてよいでしょう。代表的な遺跡を見てみましょう。先ほど名前が挙がった上越市吹上遺跡は後期中葉～後葉にも集落が営まれています。北陸系の法仏式土器が多数派を占めていますが、中期中葉～後葉と同じく信州の土器も目立ちますので、引き続き北陸と信州をつなぐ結節点の役割を担ったことがわかります。同じ上越市の裏山遺跡^{うらやま}は高田平野西縁の丘陵の頂部に形成された遺跡で、高田平野を眼下に見下ろす絶好の眺望の遺跡です。しかし稲作農耕民である当時の人びとがなぜこのような高い丘陵上にムラを構えるのでしょうか。住居跡がまとまる頂上部の周囲の斜面には溝を巡らしてもいます。握るのに手ごろな礫がまとまって出土しており投弾の可能性が高いと考えられています。これは、『後漢書』^{ごかんじょ}に倭国大乱、『魏志倭人伝』^{ぎしわじんてん}に倭国乱と記された時期と重なることから、社会的緊張に備えた防御性集落だと考えられています。弥生時代後期の北陸では、通常集落は平野部に営まれますが、平野部を見下ろす丘陵上の各地にもこうした高地性集落が築かれています。最南端の福井県鯖江市弁財天古墳群遺跡^{べざいてん}では、平野部からの標高差が100mもある険しい丘陵上に小規模なムラを構え、丘陵の岩盤を掘削して深さ3mもの濠を二重に巡らしており、防御性の確保に努力しているのがよくわかります。新潟県内の妙高市斐太遺跡群^{ひだ}や新潟市秋葉区古津八幡山遺跡^{あきは ふるつはちまんやま}は、北陸各地にみられる高地性集落とは異なって、通常は低地部に立地する大規模集落がまるごと丘陵上に設けられた実例で、古津八幡山遺跡は後期初めから後期末まで長期にわたって継続する点でも、他の高地性集落とは異なることが注目されます。さらに新潟平野の北端に位置する村上市山元遺跡^{やまもと}も高地性集落で、小規模ながらこの種の遺跡としては最北端に位置します。北陸系の集落立地といつてよいでしょう。

後期後葉は、北陸系文化の進出が目覚ましく、その担い手は社会的緊張を感じていたはずですが、しかしそうした段階であるにもかかわらず遠隔地どうしが盛んに交流することがよくわかります。裏山遺跡では、鉄板を折り曲げた形の鋤^{すきくわ}の刃先が6点も見つかっていますが、従来類例は北部九州や山陰に多く発見されていたものです。三条市経塚山遺跡^{きょうづかやま}では板状鉄斧、長岡市姥ヶ入南遺跡^{うばがいらみなみ}では袋状鉄斧^{うぶさく}が発見されましたが、いずれも朝鮮半島製の鉄斧がもたらされたものです。古津八幡山遺跡^{ふるつはちまんやま}の方形周溝墓^{しゅうこうぼ}に副葬された鉄剣や、山元遺跡で発見された筒形青銅製品やガラス玉も近畿以西で製作されたものでしょう。後期前葉まで以上に、日本海沿岸の広域交流が盛んとなり、遠隔地間で物資が流通するようになりました。日本海という、世界的に見れば内海ともみられる穏やかな海がこうした交易を可能としたのでしようが、古津八幡山遺跡や吹上遺跡は陸路や山越えでの交易もまた盛んであったことを証明しています。後期後葉の古津八幡山遺跡は、北陸系の土器が多だけでなく、在来の縄文を用いる土器（天王山式系）の伝統も明瞭です。こうした北陸系と在来系の二群が共存する様子は、会津盆地でも同様です。会津盆地のほぼ中央に桜町^{さくらまち}という遺跡がありますが、盆地中央には後期前葉まではほとんど集落は形成されませんでした。そんなところに突如大規模な集落が出現し、しかも住居は^{たてあな}竪穴式よりも平地式という北陸の平野部でよくみられる形式で、四隅が切れる方形周溝墓という墓制も北陸に由来します。古津八幡山遺跡が丘陵上にあるため、竪穴住居ばかりであることと比べると、古津八幡山遺跡以上に北陸的だと感じるほどです。しかし、直線距

離で約75km離れる古津八幡山遺跡と桜町遺跡の間には、同時期の大規模集落は見つかっていないところを見ると、両遺跡は互いに隣の村であり、盛んな交流が重ねられたとみるべきでしょう。

さらにこの時期の新潟県域で興味深いのは北方系の人びとの足跡が明瞭になることです。北海道の統縄文文化の土器が胎内市兵衛遺跡や新潟市 椛 C 遺跡・南赤坂遺跡ではまともまっています。山元遺跡でも1点見つかっており、破片が1～数点みられる遺跡は下越の海岸寄りに点在します。この統縄文土器は後北C1式という名称の土器型式で、津軽平野以北が主な分布域ですから、そこから下越界限との間を往来して西日本方面からもたらされた物資や情報を入手したのでしょうか。リレー式が基本であるとしても、もはや日本列島を横断・縦断するほどの交流が実現しているといってもよいでしょう。

おわりに

弥生時代と言っても新潟県域ですとBC4世紀前後からAD3世紀までと長期にわたります。その間、以上見てきたように、新潟県域はつねに東・西・南・北の隣接地域と盛んに交流を重ねています。はじめは土器のデザインなどの面に留まりましたが、やがて稲作や装身具・集落形態など、さらには鉄器や青銅器などの当時最先端の技術や器物の往来にまで進みます。しかもそうした地域間交流はリレー式を含むとしても日本列島を覆うほどの規模になりますし、朝鮮半島など大陸世界もリンクしてきます。ちょうどその頃、西日本の最有力者たちは大陸の政治的世界・王権・王朝とも交渉を重ねるようになります。そうした日本列島内、さらには東アジアを巻き込む交流が日本列島社会を政治的世界へと変貌させていきます。それが古墳時代社会の形成へとつながります。こうした日本列島を舞台とする歴史の変遷過程が、新潟県域を探るだけでも見えてきます。新潟県域の弥生時代・文化の魅力はそこにあると考えます。

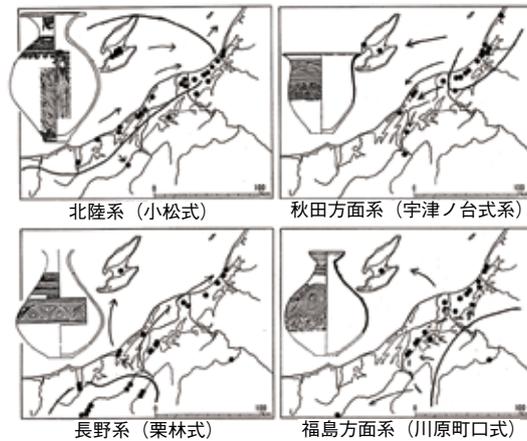


図1 中期後葉における東西南北4系統の土器型式

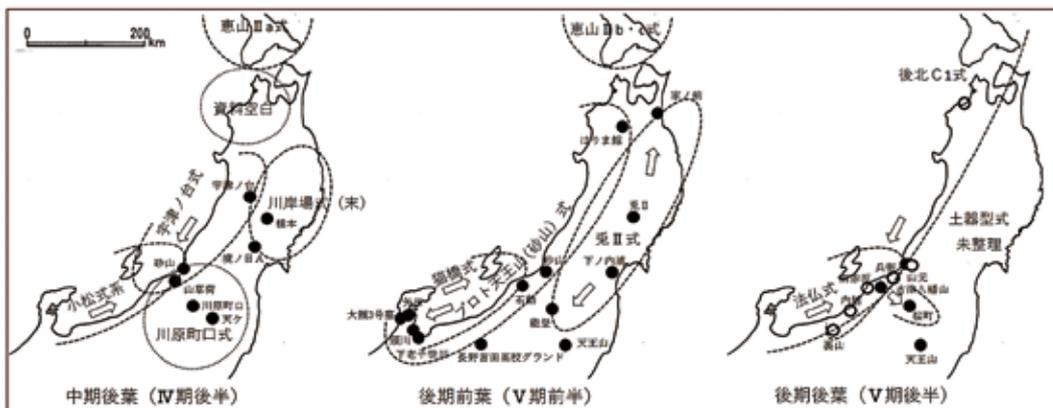


図2 中期後葉から後期後葉への土器系譜分布の変遷

古津八幡山遺跡

— 明らかになった弥生時代の埋葬施設と新たに見つかった方形周溝墓・竪穴建物 —

所在地 新潟市秋葉区古津

調査原因 保存目的の確認調査

調査期間 令和4（2022）年7月20日～11月18日

調査面積 179.78㎡（令和4年度新規調査部分）

古津八幡山遺跡は、標高約50mの丘陵上にある弥生時代後期（約1,900年前）を中心とした大規模な高地性環濠集落で、古墳時代中期（約1,600年前）頃には県内最大の古津八幡山古墳が築かれます。弥生時代から古墳時代にかけての変遷や、北陸や東北との地域間関係など、当時の日本列島の社会情勢を考える上で重要な遺跡であることから、平成17年に国の史跡に指定されました。

史跡をより適切に保存・活用していくため、平成29年度から遺跡北東域周辺の史跡指定地外における遺跡の状況把握を目的とした確認調査を行っています。今年度の調査地は、標高約50mの丘陵頂上部から北東へ一段下がった標高約23mの丘陵中腹域の尾根筋にあたり、平坦面や緩斜面からなります。

今年度の発掘調査（第25次調査）では、昨年度調査で見つかった方形周溝墓（SZ743）の形や規模の確定、3基の埋葬施設（埋葬部1～3）の規模・構造の確認、方形周溝墓（SZ743）周辺における遺構の分布状況の把握をおもな目的として調査を行いました。

方形周溝墓（SZ743） 東辺の周溝が確認され、方形周溝墓の形や大きさが確定しました。周溝の四隅が途切れる形態で、周溝の内側で計測すると、長軸（南北）9.6m、短軸（東西）8.4mを測り、当遺跡の中で最大の方形周溝墓となります。また、今年度の調査で埋葬部4が新たに見つかり、昨年度の調査で確認されていた3基の埋葬施設（埋葬部1～3）と合わせ、合計4基の埋葬施設があることが判明しました。

各埋葬施設の墓壙の形や大きさも確認できました。いずれも平面形は隅丸長方形で、埋葬部1が長軸約3.4m、短軸約1.8m、埋葬部2が長軸約2.5m、短軸約1.2m、埋葬部3が長軸約2.2m、短軸約0.7m、埋葬部4が長軸約2.7m、短軸約1.1mです。

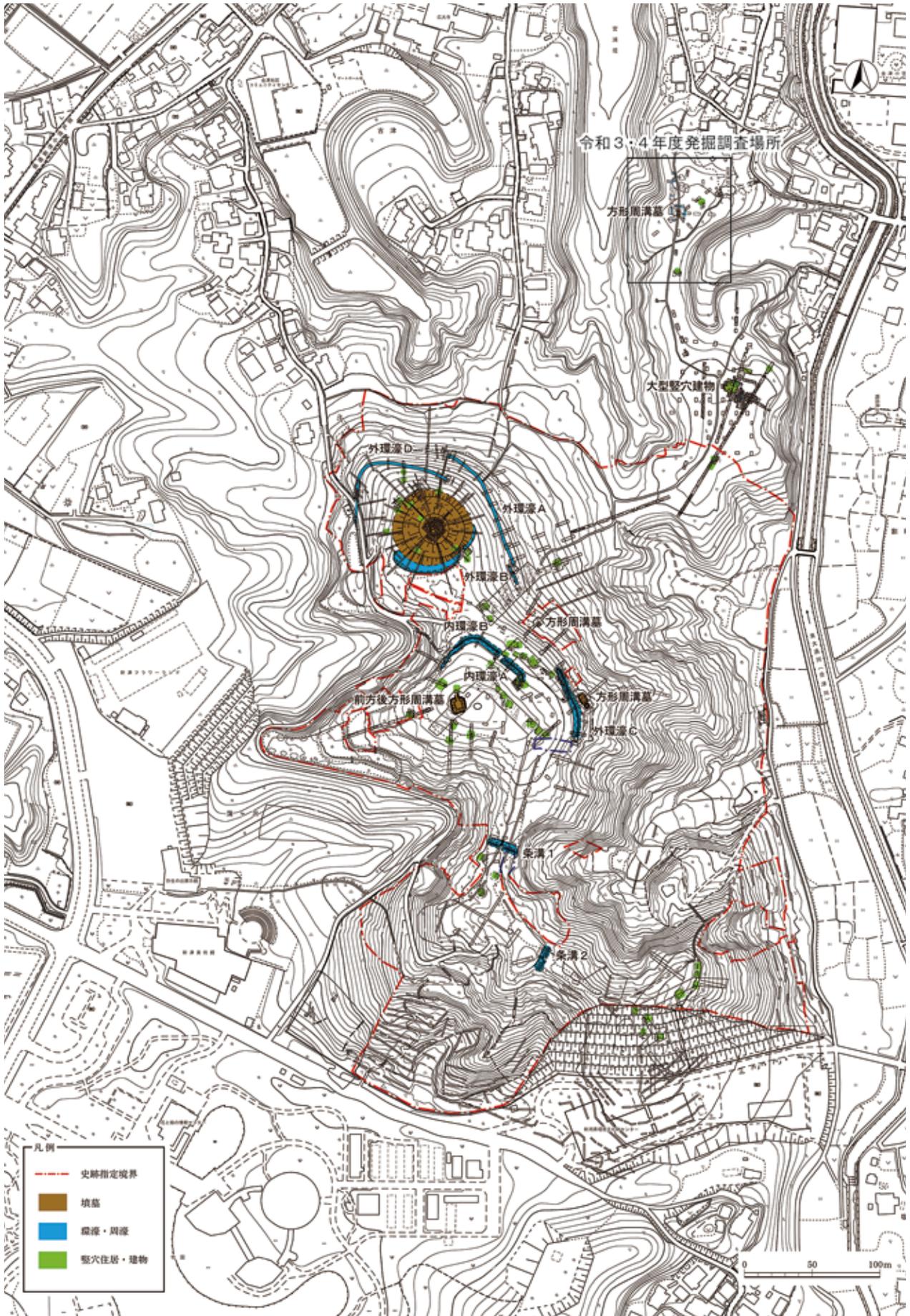
また、埋葬施設の構造については、埋葬部1が板で囲った空間に棺を入れた木槨構造で、それ以外の埋葬部2～4は棺を直接埋葬した木棺直葬であったと判断されます。埋葬部1の木槨部分は、外寸で長軸約3.0m、短軸約1.2m、埋葬部1の木棺推定範囲は長軸約1.9m、短軸約0.8mを測ります。当時、木槨構造の埋葬施設は東日本には基本的に分布をせず、西日本において最上位に位置づけられる支配者層の埋葬形式であったと考えられています。埋葬部の規模や構造からは、埋葬部1が最も上位で中心的な埋葬施設であったと判断されます。

出土遺物については、周溝から壺、甕、破損したガラス玉1点などが、また、埋葬部1から高杯や完形のガラス玉1点、石鏃2点などが出土しました。出土遺物から、弥生時代後期末頃のお墓と推定されます。**方形周溝墓（SZ822）** 方形周溝墓SZ743から北西約20mの場所において、方形周溝墓が新たに1基発見されました（SZ822）。周溝の内側で計測すると南北約5mの規模となります。周溝は、南辺、東辺、北辺の一部を確認しており、幅約0.9～1.0m、深さ約0.4mで、断面は逆台形状となります。

方形周溝墓SZ743は四隅が途切れる形態のお墓でしたが、方形周溝墓SZ822は少なくとも南東隅と北東隅のコーナーは途切れない形態であることが確認できました。周溝からは礫が定量出土しています。後述する竪穴建物（SI821）の周溝を壊してつくられていることから、竪穴建物（SI821）より新しい時期のお墓といえます。



古津八幡山遺跡空中写真（南から）



古津八幡山遺跡全体平面図 (S=1/4,000)



方形周溝墓 (SZ822 東から)



竪穴建物 (SI802 西から)



竪穴建物と方形周溝墓 (SI821・SZ822 北東から)



方形周溝墓 (SZ743) 出土土器 (左)・ガラス玉 (右上)・石鏃 (右下) (縮尺不同)



方形周溝墓 (SZ743) 全景 (南から)

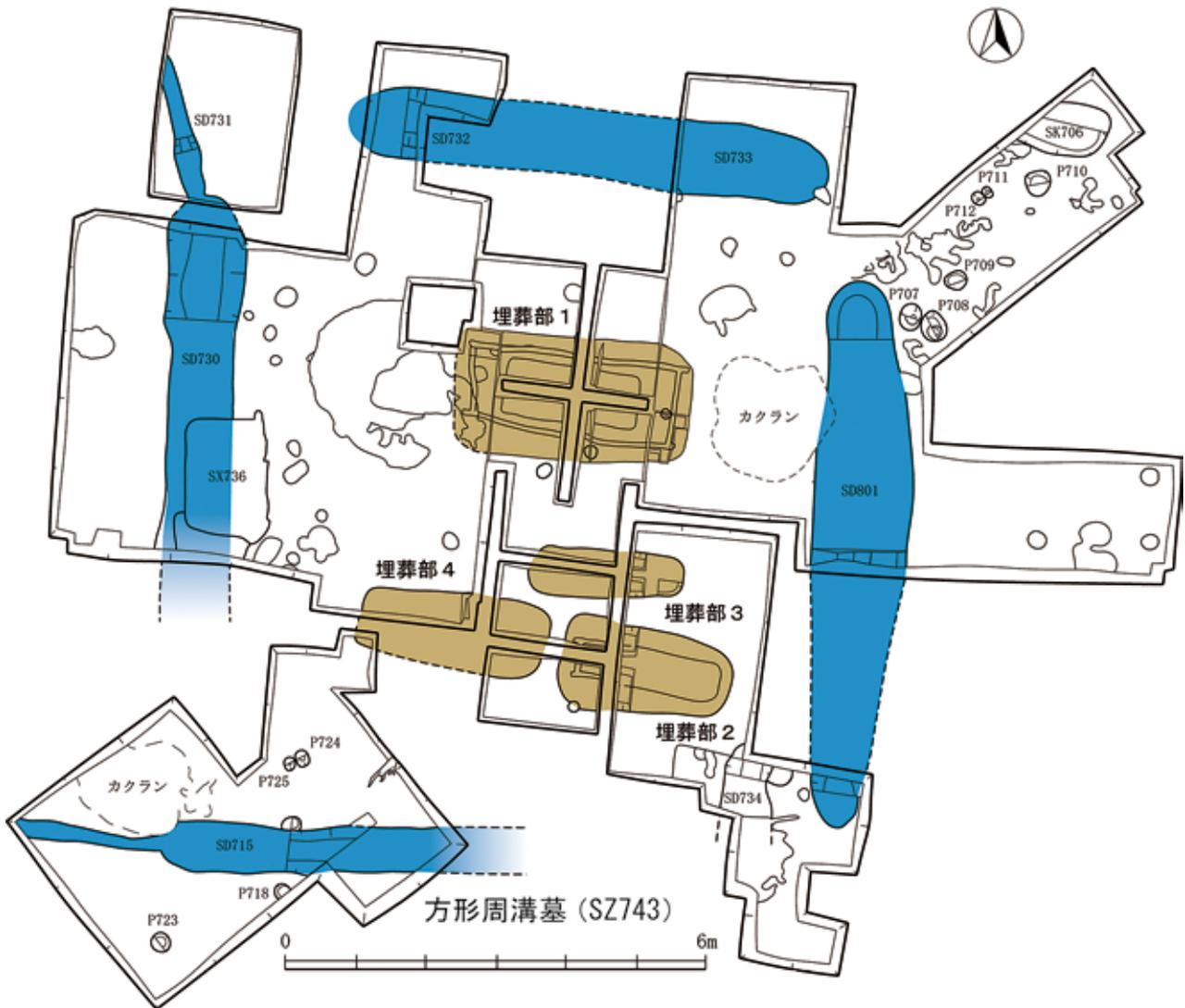


方形周溝墓 (SZ743) 調査風景 (北東から)



方形周溝墓 (SZ743) 埋葬部1 (東から)

令和3・4年度古津八幡山遺跡発掘調査遺構平面図 (S=1/400)



古津八幡山遺跡方形周溝墓 (SZ743) 平面図 (S=1/100)

竪穴建物 (SI802・SI821) 今年度の調査で竪穴建物が新たに2棟発見されました (SI802・SI821)。SI802は方形周溝墓 (SZ743) の北東約15m、SI821は方形周溝墓 (SZ743) の北約15mにそれぞれ位置します。SI802は建物の南東部及び周溝が確認されています。平面形は円形と推測され、規模は直径5mほどと推定されます。SI821は、竪穴部分の落ち込みは後世の削平のために残存していませんでしたが、西側から北側にかけて建物に伴うと考えられる周溝が確認されました。また、建物に伴うと推測される柱穴が調査区内で3基検出されており、SI821は、一辺6mほどの4本柱構造の建物と推定されます。なお、出土土器からどちらの竪穴建物も弥生時代後期後半の建物と推定されます。

今年度の調査によって、丘陵中腹域では弥生時代後期後半に建物が複数棟存在し、またそれ以降は墓域としても利用された実態が明らかになってきました。弥生時代後期後半は頂上部の環濠が機能しており、頂上部が集落の中心であったと考えられることから、中腹域の空間を利用した背景が留意されます。

方形周溝墓 (SZ743) は複数埋葬である点や埋葬施設に木槨を採用している点など、東日本では特異なお墓といえ、西日本の墓制の影響が強く及んだお墓と考えられます。なお、今年度の調査地から南東約100mに位置する弥生時代終末期の大型竪穴建物 (SI 1、令和2年度調査) も、6本柱構造である点や排水溝の存在などから西日本との関連が推測されます。これらのことから、古津八幡山遺跡においては弥生時代後期末以降、西日本の有力者層との関係がより強まったと考えられるとともに、丘陵中腹域が頂上部とは性格が異なる空間として認識、利用されていた可能性が示唆されます。 (相田泰臣)

茶院 A 遺跡

にしかんばら
- 西蒲原の低地に広がる奈良時代の集落群 -

所在地 新潟市西蒲区打越

調査原因 打越地区県営ほ場整備事業

調査期間 令和4（2022）年7月20日～11月18日

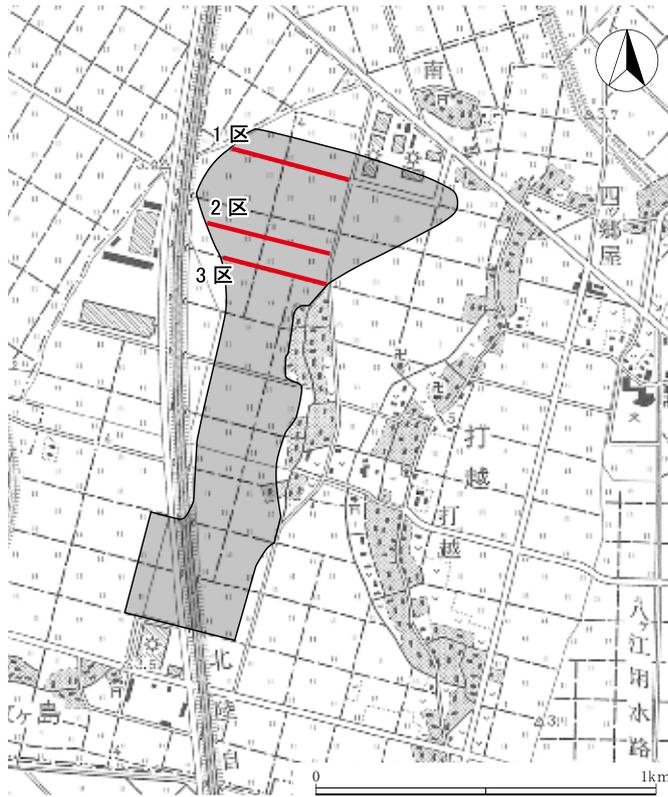
調査面積 2,530㎡

茶院A遺跡は、西蒲区旧鎧潟よろいがたの南4kmに位置し、現況は標高2.0m前後の沖積地の遺跡です。遺跡の東側には、現在の打越集落うちこしが南北に細長い自然堤防上にあります。昭和25年に発見された当初の遺跡の範囲は、現在の遺跡の南端、打越集落うちこしと牧ヶ島集落まきがしまの間でしたが、平成27年から行われた試掘調査によって遺跡の範囲が北へ拡大し、現在は東西0.5km、南北に1.5kmと現在の打越集落同様、南北に細長い形状になっています。

今回の発掘調査は、打越地区ほ場整備事業に伴うもので、令和4年度は用排水路敷設が予定されている3路線分について発掘調査を行いました。広いところで幅2.4mと限られた範囲の調査でしたが、掘立柱建物を構成する木柱列たてあなが2本と堅穴状遺構とこうが4基、溝・土坑が確認されました。木柱列は、柱間4間のものが近接して2列あり、柱の直径は大きいもので25cmでした。ミカン割材（断面が扇形になる割り方）が1点で残りはすべて芯持ちの丸木材が使われていました。柱の底面は先端が尖ったものと平らに加工されたものがあります。柱は広葉樹で、詳細な樹種については、分析中です。また、堅穴状遺構では、炉跡などは見つかりませんでした。周溝（建物の周囲の排水溝）があるため住居と考えています。これらの住居と考えられる遺構は、いずれも3区の中央部で見ついています。

遺物は、奈良時代中頃から平安時代初頭の土師器・須恵器すえきが出土しました。土師器の多くが煮炊きに使う甕で、ハケメが内外面に施される西古志型にしこしと分類されるものがほとんどです。また、須恵器は杯・杯蓋・甕など一通りの器種が揃っています。須恵器の産地は、新津丘陵産や佐渡小泊産がみられます。須恵器の中には、器の外表面や底面に墨で文字を書いた墨書土器ぼくしよが11点確認されています。文字は「宅」「飯」「丈〔部〕カ□」「田」と書かれたものがあり「宅」の字が5点と最も多く、1区の自然流路NR30での出土が目立ちます。「宅」は、農業経営の拠点を意味します。同じように「宅」と書かれた墨書土器が多数出土している石川県上荒屋遺跡かみあらやの例では、荘園名しやうえんが書かれた墨書土器が一緒に出土している例があることから、荘所しやうしよ（荘園の事務所）の施設名の可能性があります。また「丈〔部〕カ□」は、長岡市八幡林遺跡はちまんばやし出土の木簡に記載のある人物で、蒲原郡司かんばらぐんじの主帳しゅちやうと考えられます。

茶院A遺跡を含む旧鎧潟周辺には、同じく奈良・平安時代の遺跡である仲歩切遺跡なかぶきり・下新田遺跡しもしんでんのほか、林付遺跡はやしづけがあります。いずれの遺跡も大型の柱が見ついていることに加え、荘園名や郷名ごうを示す墨書土器が出土するなど、茶院A遺跡との類似点が多くあります。茶院A遺跡が成立した奈良時代の終わり頃は、743年の墾田永年私財法を機に私有地（荘園）の開発が盛んになった時期です。私有地拡大を企図した蒲原郡司が、鎧潟周辺を拠点として開墾を行ったと推測できます。しかし、茶院A遺跡では9世紀後半の遺物が出土していません。茶院A遺跡の遺構には地割れを伴う噴砂（液状化の痕跡）が見られることから、大きな地震の被害によって遺跡が途絶えた可能性があります。（今井さやか）



茶院A遺跡範囲 — 2022年調査地点
 (新潟市発行の1万分の1地形図に遺跡範囲を追記して掲載)



調査区遠景 (東から)



調査区遠景 (南から)



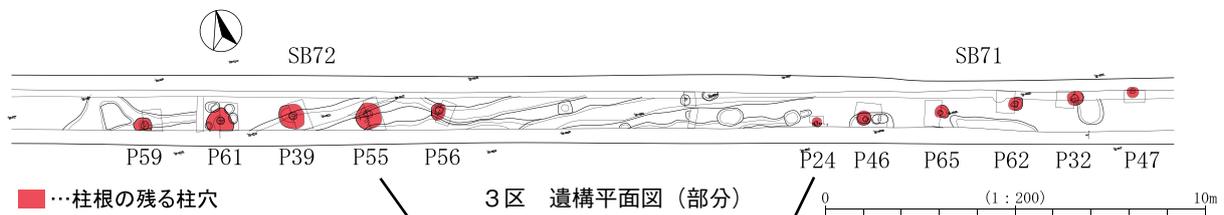
1区 自然流路 (NR30)



「宅」墨書土器



土師器鍋 (NR30出土)



2区 噴砂痕



3区 掘立柱建物 (SB1、SB2)



3区 竪穴状遺構 (SI12、SI52)

寺裏遺跡

— 数百年前の集落と米作りの痕跡 —

所在地 新潟市西蒲区馬堀

調査原因 馬堀地区県営ほ場整備事業

調査期間 令和4（2022）年8月2日～10月11日

調査面積 948.76㎡

はじめに 寺裏遺跡は、新潟市西蒲区の信濃川と角田山麓の間に広がる沖積地に立地しています。茶院A遺跡の西約3.5kmに位置しています。付近には自然堤防上の微高地に集落が形成されています。遺跡周辺は標高2.5～3.0m前後で平坦な水田が広がっています。ほ場整備事業に伴う事前調査の際に珠洲焼や建物の柱穴が見つかったことから、本発掘調査を行いました。

地形と地層 寺裏遺跡の西方約200mには、飛落川が南北に流れています。事前調査からこの飛落川に沿って南北に伸びる自然堤防状の高まりが把握されました。調査を進める中で、地表面から10～20cm程度の深さに、遺物包含層である黒褐色土と遺構確認面である灰褐色土を確認できました。もともと小高い地形だったためか、こうした地層が残っているのは一部のみです。

遺構 土坑2基、井戸7基、性格不明遺構1基、溝状遺構12条、耕作関連遺構2面、柱穴群が見つかりました。溝状遺構はほとんどが南北に流れるもので、特に調査地中央部に集中しています。井戸はすべて素掘りで、井戸側や水溜めなどは確認されませんでした。調査地北側の耕作関連遺構とした遺構では、当時の人の足跡や農機具の痕跡と思われる黒い斑模様が見つかりました。一部の溝状遺構と耕作関連遺構の間に畝状の高まりが確認できることから、水路と水田の跡と推定されます。柱穴群の一部は掘立柱建物を構成しています。

遺物 珠洲焼、瀬戸焼、唐津焼といったやきもの、石製品や木製品が出土しました。珠洲焼は12世紀後半～15世紀に能登半島で生産された陶器で、15世紀前半頃の甕と播鉢が見つかりました。瀬戸焼は12世紀以降に愛知県で作られた陶器で、15世紀末～16世紀頃の小壺1点が見つかりました。唐津焼は16世紀後期以降に佐賀県や長崎県で作られた陶器で、17世紀前半の椀が6点見つかりました。これらの点から、遺跡の時代もおおむね中世～近世初頭と考えられます。

まとめ 遺跡が現在の地表から浅い場所にあるため、過去の道路・水路の工事や耕地整理の影響を受け、遺構の残存状況が良くありませんでした。遺構ごとの詳細な時期や変遷は明らかにはできませんでしたが、出土した遺物の年代から、室町時代から江戸時代初めに断続的に営まれた小規模な集落跡と考えられます。なお、集落の主体部は今回の調査範囲に含まれていませんでしたが、遺構の位置関係から、北東側に存在していたと考えています。

今後は周囲の遺跡との比較や文献資料などもふまえ、寺裏遺跡を評価したいと思います。（長谷川眞志）



調査区遠景（南東から）



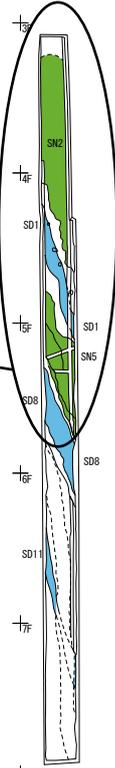
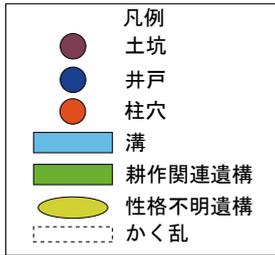
調査区遠景（北から）



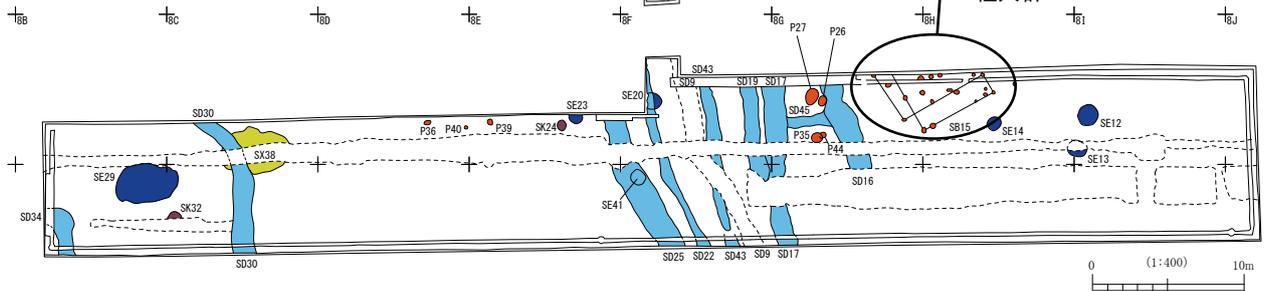
溝と畦畔、耕作関連遺構



井戸 (SE23) 木製品出土状況



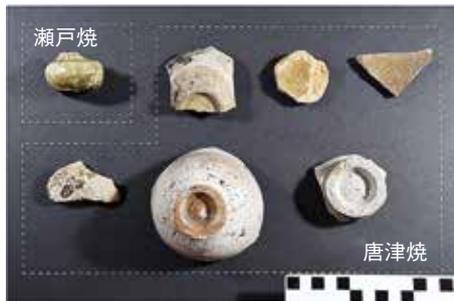
柱穴群



寺裏遺跡遺構平面図 (S = 1 : 500)



珠洲焼



唐津焼・瀬戸焼



左：昭和45年発行 国土地理院「巻」
 右：明治44年測図 大正3年発行陸地測量部「弥彦」
 ● 寺裏遺跡
 どちらも遺跡周辺に人家等は確認できませんが、道や水路が大きく変わっています

古津八幡山遺跡



現地説明会

茶院A遺跡



現地説明会

寺裏遺跡



現地説明会

編集・発行 新潟市文化財センター
〒950-1122 新潟市西区木場2748-1

電話 025 (378) 0480

<https://www.city.niigata.lg.jp/kanko/bunka/rekishi/maibun/index.html>

発行 令和5 (2023) 年2月13日